

研究集会開催報告書

平成23年 8月 30日

国立天文台長 殿

(代表者)
 所属・職名 名古屋大学大学院 理学研究科
 博士後期課程3年

氏 名 古澤 圭



研究集会名	第41回天文天体物理若手夏の学校
開催期間	23年 8月 1日 ~ 23年 8月 4日
開催場所	〒443-0105 愛知県蒲郡市西浦町大山25番地 西浦温泉 ホテルたつき
参加人数	総参加者数 382名(一般参加者 360名、招待講師 22名)
研究集会の概要	天文天体物理若手夏の学校は天文学・天体物理学を研究する若手研究者のために若手研究者自身の手によって運営・開催されている研究会である。今年度我々が開催した第41回天文天体物理若手夏の学校では、日本国内における若手研究者に研究発表と交流の場を提供することで、研究や研究発表能力の向上、若手研究者同士の交流促進、研究会運営の経験を積むことの3つを目的として、具体的に以下の5項目の達成を目指した。 (1)天文学、天体物理学の幅広い分野からの発表がある研究会にする。(2)若手研究者に発表訓練の機会を与える。(3)第一線で活躍されている研究者をお招きする。(4)若手研究者同士の交流の場を提供する。(5)若手研究者が研究会を運営する能力を培う。 これらの項目を念頭に、愛知県蒲郡市の「ホテルたつき」において3泊4日の日程で次の分科会、企画を開催した。 (Ⅰ)分科会 「相対論」、「宇宙論」、「観測機器」、「銀河・銀河団」、「太陽・恒星」、「コンパクトオブジェクト」、「宇宙線」、「惑星系」、「星間現象」の9つの分科会により構成された。また、各分科会内で参加者による口頭講演及びポスター発表と招待講師による講演を行った。 (Ⅱ)全体企画 公募企画として「アウトリーチ2010年代！」を行なった。前半には大学院生が主体的に活動している団体の活動内容を紹介し、後半で各団体メンバーでパネルディスカッションを行なった。現在行なわれているアウトリーチ活動を総括するとともに、様々な取り組みにつなげてく可能性を模索することで、今後10年の科学研究と社会の関係を明確にした。 (Ⅲ)懇親会 他の参加者や招待講師の方々と交流する機会を用意することで研究内容や研究者としての生き方について議論し、研究意欲を高めることを目指した。 なお今年度の夏の学校は名古屋大学の学生を中心とした事務局が運営を行った。

(裏面あり)

	今年度の夏の学校は招待講師22名を含む合計382名の参加者を迎えて開催した。3泊4日の合宿形式を通じて、参加者は開催期間中集中して講演、議論や交流を行うことができた。以下では開催時に回収したアンケートを基に、総括を行う。 ・夏の学校全般について 事務局の事前・当日の対応、開催時期に関しては約9割の方から満足という回答をいただいた。また、合宿形式については約8割の方から賛成を得られた。参加目的としては発表、交流、情報収集といった回答が多く、参加した意義としては自身の研究の進展や他の若手との交流という回答が多く得られた。 ・全体企画、分科会について 招待講師による招待講演や大学院生による一般講演(口頭講演及びポスター講演)など、各分科会での内容については好評を得ることができた。口頭講演の講演時間(口頭発表12分、質問3分)については、9割弱の方が適当であるという回答であった。昨年度までは全体企画としてテーマの決まった事務局企画と参加者からテーマを募る公募企画の2件が開催されていたが、今年度から全体企画を2件とも公募企画にした。応募が1件だったため、全体企画は1件のみ行いその分一般講演に充てる時間を増やした。なお、参加者の約6割の方は公募企画は1件で良いとの回答であった。また、これまで京都大学基礎物理学研究所から相対論分科会と宇宙論分科会の統合を推奨されてきた。これに対して、来年度の夏の学校事務局、今年度の分科会座長団及び来年度の分科会座長団で話し合いを行った結果、来年度の夏の学校では「重力論・宇宙論分科会」として統合されることとなった。 ・ポスターセッションについて ポスター講演では、天文学会と同様にポスターの掲示に加えて3分間の口頭発表と数講演ごとに若干の質問時間を設けた。これに関して、5割弱の方が質問時間は必要と回答される一方、2割強の方は不要と回答された。この項目は毎年意見が割れるところであり、今後もポスター講演のあり方について検討する必要がある。 ・パンフレット・予稿集について 前年に引き続き会場案内等のパンフレットと講演予稿集を併せた冊子を配布した。冊子の内容・体裁は8割の方から「非常に良い、良い」という回答が得られ、参加者にはおおむね満足していただけたと思われる。 ・会場について 会場に関して、講演を行う会場の広さについてはおおむね満足していただけたがポスター会場については狭かったという意見が多く、反省すべき点である。 ・参加費用について 参加・宿泊費に関しては約4割の方が「やや高い・高い」との回答であった。これについては、今年度の1泊3食会場費込9000円という金額は昨年度と同程度(1泊3食8900円)であり、300人を超える参加者をまかなえるだけの会場の候補は少なく、我々としては最善の努力を尽くしたと考えている。しかし、これからも多くの参加者を迎えて夏の学校を続けるためにも、引き続き会場選定の基準については検討しなければならない。 以上のことから、「研究、研究発表能力を向上する」、「若手研究者の交流を促進する」という夏の学校の目的を夏の学校主催者だけでなく参加者も共有し、達成できたと考えている。また、事務局員の多くが運営に携わったことは良い経験になったと肯定的にとらえており「研究会運営の経験を積む」という目的も達成できたと考えている。
研究集会の成果	夏の学校では例年遠方からの参加者に対し旅費補助を行っております。参加者へのアンケートでは、所属機関から一部でも費用を出してもらえる学生は全体の5割、全額補助は更にその5割という結果があり、旅費補助の必要性を強く示しています。今年度は主に個人からの寄付収入を増やすことができたため、旅費補助希望者112名に対して自己負担額を0円にまで抑えて旅費を補助することができました。しかし個人や企業からの寄付収入は毎年変動が大きいので、貴研究機関から頂く補助金は安定した運営に欠かせないものになっています。どうかこのような夏の学校の状況を御理解頂き、来年度以降も継続的な御支援を頂ければ幸いです。最後にりましたが貴研究機関の援助に対して深く感謝申し上げます。
その他参考となる事項 (希望事項も含む)	